

じょうしょうあん くすり き
常照庵の薬の木 (生路)

いくじ じょうしょうあん
生路にある常照寺は、もと常照庵といつて
むろまちじだい いしんぜんじ
室町時代に惟信禪師というえらいお坊さんが開
いたお寺です。

いしんぜんじ うえき だいす てら
惟信禪師は、植木が大好きでしたので、寺が
できると、その石段の下に数十株の植木を植え、
まいにち みず だいじ そだ なか
毎日、水をやって大事に育てていました。その中
に一本の薬になる珍しい木がまじっていまし
ぽん くすり めずら き
た。その木は、沈香という熱帯産の香木に似て
あき ふゆ は お こま
いて、秋や冬になっても葉が落ちないで、細か

うっ は ほん
な美しい葉が、いつも青々と茂っていました。
き くすり
その木が薬になるなどとは、夢にも思わなかつ
いしんぜんじ
た惟信禪師でしたが、ほかの木とかわったところ
うつく
ろのある美しいこの木を特にかわいがって、
おきな こ そだ たいせつ
幼い子でも育てるように大切に育て、どんな小
えだ けっ お
さな枝でも、決して折ることをしませんでした。
き えだ き
ところが、この木の枝を切つて、陰干しにし
せん の
たのを煎じて飲むと、どんな病気にでもきくこ
し ひと
とを知っていた人が、あるとき、常照庵の下を
とお
通りかかりました。

めずら き むかし しん し
「はてさて、これは珍しい木だ。昔、秦の始

こうてい ちゅうごく どういつ ふうちやうじゆ
皇帝が中国を統一したとき、不老長寿の
れいやく 木 にほん さが
霊薬となる木を日本で探しあてさせたという
が、これは、その木と同じものにちがいない。
この木があれば、病気で苦しむおぜいの人
が、どんなに助かることか。」
そうと知ってから、その人は、なんとかこの
木を譲り受けたいものだと思っていました、
和尚さんが、朝晩、水をやっては大切に育てて
いることを知っていましたので、なかなか言い
出すことが出来ませんでした。
ところが、ある年、村に熱病が流行して、



おおぜいの人が病の床に伏したことがありました。

「常照庵の薬の木は、熱さましにもなるはずだ。なんとかあの木を使って病氣の人を救ってあげたいものだ。」

そう思ったその人は、ついに決心して、常照庵の和尚さんをよく知っている人に頼んで、この木の枝を譲ってもらおうように申し入れました。

その話を聞いた惟信禪師は、「よろしい。病気で苦しむ村の人たちを救うことが出来るなら、喜んで差し上げましょう。」

そういうと、すぐその場で立ち上がって、自らおの手にして石段を降りて行きました。

そして、大切にしていた木の枝をたくさん切り取って、薬の木のことをよく知っている人に届けさせました。

この惟信禪師の思いやりのあるはからいのおかげで、熱病に苦しむおおぜいの村人が救われました。

このことが世の中になかとなり広まりました。漢詩を作った惟信禪師の仁徳の高さをほめたたえる人がおおぜい現れました。京都五山

のお坊さん、万里集九もその話を聞いて感心した一人です。さっそく惟信禅師のことを思い浮かべて次のような漢詩を作りました。

(訳文)

鼈背仙山机案間
机によって眺むれば、亀の

背に似た山の影

薬苗吹露一庵閑
薬樹に朝露、庵は静か

不知世故多於髪
黒髪の繁き憂の世を忘れ

漁笛秋残落照湾
漁笛はひびく秋の夕波

常照庵の菓の木の話は、この漢詩の前書



きの部分に書かれていて、室町時代の中ごろ、万里集九が、京都五山の禅宗のお坊さんたちの漢詩を集めて作った「梅花無尽蔵」という本に載っているものです。

▲ 惟信和尚薬樹の故事(尾張名所図会より)